

ペン俳句会 句会報(三四九号)

令和五年十月五日(木)

兼題『新米』、席題『待』

句会を、先月と同じ場所で開催。出席者は十三名
(投句十四名)。

首藤 しずを

不揃ひのかぼす故郷の陽射し浴び

美しき名の競ふ店頭今年米

電車待つ人影淡し菊日和

ふいりりと風の使ひや草雲雀

掃き寄する中よりゆらり秋の蝶

中村 晃也

古漬けを添え新米の握り飯

薪で炊く新米ほのと匂ひけり

卵かけ新米のつや流し込む

秋めくやキャンセル待ちの航空券

シャッター街風吹きぬけてより残暑

新田 ゆふき

遥拝の嶽や月下の御師の宿

月待ちの二十六夜山雨催ひ

新米をとぐ母の背や里の便

きりぎりす読経に和する音の高し

大津 そうかい

「ひまわり」の調べ深むる秋思かな

おけら鳴く熱湯好みの考なりき

伸びしては伸びゆく嬰よ草の絮

蓑虫や余生に何を期待せむ

新米やこのときめきは神代より

宮原 凧

宿下駄を鳴らし追い駆く秋神輿

新米の水は少なめ妣(はは)の文字

ミステリー閉ぢてちちろの闇となり

花野行きバス待つており一人旅

秋うらら銀座和光に待ち会はし

安藤 晃二

胃力メラの憂ひや芙蓉揺るる道

電車待つ鉄路に熱気秋彼岸

山峡に金色溢れ今年米

乙女らの祭太鼓や秋日和

秋田よりずしりと届く今年米

松田 一文字

初雪や朝から浸かる露天風呂

郷からの宅配便や今年米

竹林の闇立待のかうかうと

法師蟬飛び立ち尿(し)とを放ちけり

尾の先で水面を叩く蜻蛉かな

高橋 由紀子

手水鉢の花揺れてをり秋時雨

大会や草間にポール秋の雲

東雲や待宵草と吾と犬と

夫々の週末を背に秋の駅

友来たり馳走に新米握り飯

内藤 まりこ

彼岸花時を違へず咲きだしぬ

新米を炊き仏前に手をあはす

彼を待つ改札口の秋帽子

新米の輝く光よそひけり

満月やギターの夕べは前夜祭

長尾 進一郎

病院の待合の窓赤とんぼ

自治会の秋刀魚焼きたて長き列

足早に落ちし秋日を見届けり

新米を囲む家族の笑顔かな

高空やビルの街行く秋の風

森田 元斐

総出して下草払ひ秋祭

秋の旅色づき初めし桐一葉

神輿待つ宮へ白足袋男衆

行く人へほぐれ初めにし花薄

新米の湯気匂ひ立ちしそ昆布

志村 良知

イベントの跳ねて代々木の小望月
走りもの新米茶碗に粘りつき
秋風や唯一の本屋店仕舞ひ
稲架組みて鎌のリズムの手に響き
レンズの先雲切れ目待つ今日の月

浜口 須美子

送り出てはや帰り待つ秋の朝
秋夕立ち人待ち顔の猫を抱き
新米よと白きえふるん夕支度
亡母想ふ祈る姿勢よ月浴びて
雷鳴やお手玉ポイと投げる母

西川 知世

水引の紅の捕へし風やはし
使用書の小さき片仮名秋暑し
今年米とぎ献立の定まらず
相悪き猫とベンチに秋夕焼
虫鳴くや駅の待合室煌と

次回は令和五年十月三十日(月)〜三十一日(火)
の箱根吟行です。兼題、席題とも有りません。